



# 郷土新聞作りこつ学ぶ

## 福井で講座 審査向け中学生53人



中学生が新聞づくりのポイントを学んだ講座=27日、福井市の県立図書館

今年で25回目を迎える県中学生郷土新聞コンクールに向け、記事の書き方や紙面作りなどのこつを伝授する講座(県中学校教育研究会社会科部会、県文書館、福井新聞社主催)が27日、福井市の県立

図書館で開かれた。中学生53人が、新聞記者らから取材の方法や見出しづけのポイントを学んだ。  
福井新聞社の徳島泰彦NIEコーディネーターと文化生活部の加藤栄吾編集委員が講師を務めた。  
徳島コーディネーターは、27日付の福井新聞を題材に、見出しや写真の配置など、ニュースを伝えるための多くの工夫がされていると紹介。記事は大切なことから書くことが重要だとし「自分の意見や取材先の思いを盛り込んだ、読み応えのある記事を書いてほしい」と呼び掛けた。

ワークショップで、生徒たちは実際の記事に見出しをつけ、レイアウトも考えた。加藤編集委員は「何の記事か、何がニュースか、一目で分かる見出しをつけて」とアドバイス。新聞づくりへ「取材は人に会うのが一番。現場に足を運んでほしい」と訴えた。「不死鳥福井」と呼ばれる理由を取材したいという西ころさん(光陽中2年)は「興味を引かれるレイアウトや見

出しが大切だと思った。賞を取れる新聞を目指したい」と話した。  
(児島崇之)